

東北紀行

Tohoku Travelogue

第5号/2015年12月/編集：宮原育子¹

ご挨拶

稲葉 雅子²

今年の東北は、例年よりも暖かな雪の少ない冬の景色です。東日本大震災から間もなく5年、遅々として復興の進まない沿岸部の中で、宮城県女川町のまちびらきは明るいニュースでした。

私は、人材教育事業を手掛ける(株)ゆいネットと旅行商品を扱う(株)たびむすびの代表を務めています。旅行会社設立のきっかけは、京都市で開催されていた「洛楽キャンパス」との出会いです。僧侶・地元の経営者・農業者・大学教授など様々な人達の講義を聴き学び、それを参考に市内を観光します。北海道から14泊しての参加者もあり、学びと旅の融合は、人々の心を動かし未知の地域に足を運ぶことにつながるのだと感じました。

東日本大震災はとても悲しい出来事でしたが、震災があったことで東北は注目の的となりました。震災の直後に被災地を訪れた人は、「あの日どう過ごしたのか」

「どうやって避難したのか」と語り部に聞き、想いを共有しました。年月がたち、あのときの場所をもう一度見たい、その後の取組がどうなっているのか知りたいと繰り返し訪れる人もでてきました。被災地の産業がどのように復興しているのか知りたい、学びたいと、被災地を訪れる人もいます。津波で全壊した気仙沼の水産加工業者が、隣県の工場を週末だけ借りて製造再開を果たした話は、感動以上に、経営者としての復活にかける想いや行動力の大切さを知ることができます。同じく気仙沼にある酒蔵では、ほんの数メートル手前で津波被害を免れたものの停電によりお酒の温度管理ができず、何とかしようと奔走する社長のお話は、社員・顧客だけでなく、気仙沼の酒を出荷したいという地域復興まで見据えての行動だったのだと学ぶことができます。

私は、新しい旅の形には「まなび旅」があると考えています。その「まなび旅」を推進していくことができるのが、東北の被災地なのです。

日本エコミュージアム研究会全国大会講演

ベルギー、フランスのエコミュージアム報告*

吉兼 秀夫³

日本エコミュージアム研究会全国大会を日本観光研究学会東北支部の共催で開催させていただいた。お話をさせていただいた内容を報告する。18年前に訪問した3つのエコミュージアムを再訪した調査研修の報告である。

まずエコミュージアムの概念を説明した。新井重三の「地域社会の人々の生活、その自然環境、社会環境の発展過程を史的に探求し、自然遺産および文化遺産を現地において保存し、育成し、展示することを通して当該地域社会に寄与することを目的とする博物館である」とG.H.リビエールの「エコミュージアムは行政と住民が共に構想し、具体化し、活用する装置である。エコミュージアムは、一枚の鏡。住民は自身を認識するために、その鏡に自らを映し出す。」という定義が多く研究者によって引用される。日本エコミュージアム研究会は「エコミュージアムは地域社会の内発的・持続的な発展に寄与することを目的に一定の地域において、住民の参加により環境と人間との関わりを探る活動としくみである」

(<http://www.jecomms.jp>)としており、筆者は「エコミュージアムは一定範囲(テリトリー)内で地域の記憶の井戸を掘り、掘り出された記憶(遺産)を地域全体の中で保存・展示・活用していく博物館づくりである。」「(「自文化を自分化するエコミュージアム」月刊『地理』50巻12月号)と説明してきた。

さて、今回訪問した3つのエコミュージアムはベルギーのBois du Lucエコミュージアム、Viroinエコミュージアム、フランスのAvesnoisエコミュージアムである。18年前との変更点を中心にお話する。

3カ所とも18年前と名称を変更していた。それはテリトリーを変更(縮小)したためその名称を変えたもの(Bois du Lucエコミュージアム)、もともとの活動範囲(テリトリー)の名称にエコミュージアムの名称をあわせたものであった(他の2カ所)。社会状況の変化がエコミュージアム活動に影響を与えている点が全てでみられた。エコミュージアムの自己資金はどれも2、3割であり、人件費も含め公的な補助金を運営資金としている。政府や自治体の財政難は活動内容に制約を与える。エコミュージアムへの政治的関心も大きく影響する。3カ所

¹ 宮城大学

² 株式会社たびむすび/株式会社ゆいネット

³ 阪南大学/日本エコミュージアム研究会会長/
日本観光研究学会副会長

のうち2カ所で館長が不在であった。給与が支払えないのである。Viroin エコミュージアムでは政府の財政難が影響し、エコミュージアム発足のきっかけとなった旧トレーニュ駅舎（ブリュッセル自由大学環境研究所）の施設が売却されていた。私たちはちょうどその引っ越しの最中に訪問したのであった。財政難の中でどのように資料を保存活用するか苦労するという。ブリュッセル自由大学の教員・学生によってはじまった活動であるが、経済的に苦しくなった大学生の参加ができなくなっていることを憂いていた。

エコミュージアムは住民主体の活動であるとのイメージが強く、そのことが日本においても注目されたのであるが、当初の目的であった住民の記憶（生活の証言）の収集活動やその普及活用が3つのエコミュージアムでは一段落し、その場で住民が汗を流すボランティア活動は思いの外、多く見ることはできなかった。収集された記憶の保存、展開についてはエコミュージアムのスタッフが中心に行なっている印象である。民主的に選ばれた人々による運営にまかされる次の段階に入っているように感じられた。Bois du Luc エコミュージアムの当初の目標は、地域の知識、計画、開発を目的とした文化開発のプロジェクトに住民の参加を促すことであった。今は他の博物館や機関と科学分野における合同作業と来訪者の共通見学を可能とするグループ化を進めたいと語っていた。総会や理事会、科学者委員会のもとで粛々と運営されている印象を受けた。参加した研究者は一様に「これは博物館だね」「収集する記憶、大切に作る収集品が違うだけだ」との印象を述べ合っていた。違いとは「時間と生活の概念」である。その印象で良いのかは判断し兼ねる。エコミュージアムでなくなったのではない。大原一興らが作ったエコミュージアムのチェックリストを示したところ、21項目中15項目でYesの回答があり、Noの回答についてもエコミュージアムの概念を逸脱するものではなかった。つまりエコミュージアムの精神と活動は生きているのである（大原一興 2011「産業遺産の保存活用とエコミュージアム」かわさき産業ミュージアム講座記念論文集参照）。

他に印象的だったのはAbesnois エコミュージアムにおいて解説をしてくれたスタッフが世代交代していた点である。18年前は倒産後保存された工場の元職人自らが解説・実演をしてくれた。今回はエコミュージアムで育った次世代の職人（スタッフ）が実演・解説をしてくれた。筆者の言葉で言えば、記憶の伝言ゲームができているということである。石巻（東北）で言えば、今は震災の記憶を実際に体験した人の記憶が語り部として伝えら

れ、生き証人として活動しているが、これらを次世代以降に繋げていくことができているということになる。

Bois du Luc エコミュージアムは石炭の炭坑跡とその関連施設群域がテリトリーであるが、そこでの記憶の展示に変化がみられた。閉山した炭坑の中が資料館になり、工場内では等身大の35体の人形が当時の労働者の働く姿を表現していた。展示方法も時間という概念を意識したものであり、産業の展示ではなく働く人々の姿に焦点が当てられていた。Viroin エコミュージアムでも館長自ら機械を動かし、社会科見学に来ていた子供達に木靴を作ってみせていた。筆者が好む「何気なく訪ねて否応なく理解できる」しかけである。

「エコミュージアムは博物館の危機に応えた乱気流の中に現れた博物館の一形態である。厳格な保全の役割しか果たさず、冷たく不変で、今の時代を生きていない、破壊し焼き払うべき博物館である文化の要塞に殺到した流れである。エコミュージアムは異議申し立ての物語であり、人々の文化的関心事に接近することを望むユートピアそのものである。エコミュージアムは変貌するテリトリーに現れる活動といえる。」と読み取れる記述が

Bois du Luc にはあった。

エコミュージアムは変化している。今回訪問から次のような感想を持った。

われわれはその活動自体に住民が参加する点に注目しすぎていたかもしれない。活動自体から住民の生き甲斐や、地域活性化に目を奪われ、生きた博物館として収集した記憶に餌を与え、野にまた放すことを怠っているのかもしれない。筆者の用語で言えば、自文化の自分化を果たし、自文化にのっかって歴史を創り出す人々を評価し続け、そのしくみづくりに協力する活動であり、そのためのシンクタンク機能をエコミュージアムは果たしているように見えた。そしてまさに地域を映す鏡として社会の変容がエコミュージアム活動に反映する姿を確認できた。エコミュージアムが地域を変えるのではなく、変わる地域を映すことにもっと意識を向けるべきなのだろう。

*2015年11月15日、石巻専修大学における日本エコミュージアム研究会全国大会での会長講演概要。

東北支部大会 2015

事務局

12月19日（土）盛岡市のアイーナいわて県民情報交流センターにて、日本観光研究会東北支部大会 2015（役員会、研究大会）を開催しました。『東北紀行』次号で研究大会の詳細をお伝えします。